
ステラ

メリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ステラ

【Nコード】

N9138J

【作者名】

メリカ

【あらすじ】

「1000年前、突然起きた悪夢」

それが再び起きようとしている!!

そんなとき一人の少年があらわれる・・・

〈1〉 二つの世界 (前書き)

初投票!! 初小説です!!

うつの遅いのでたぶん更新遅いです・・・) 一週間に一回くらい?
あらすじとかコメディイっぽくないですけど!! これからコメディ
ーになります!!
(そう願ってるんですけどね...)

〈1〉 二つの世界

この世には世界が二つある

一つは《ストラル》・・・人間たちがいる世界。

もう一つは《シープ》・・・多様な種族がいて、不思議な力・・・
魔術がつかえるのだ。

二つの世界は同じ場所にある。だが次元が違ったためたがいに見えな
いようになっている。

それはなぜか？

それはこの世界を一つにしてしまうとどちらかが滅びてしまうから
だ。

まあ、神のきまぐれかもしれないがね・・・

だが、シープには危険がさまっている・・・1000年前に起きた
悪夢がまた起きようとしているのだ・・・

『2』 運命が変わった時（前書き）

二作目できました！！

結構かかるともいしましたが、意外と早くおわりました

（はじめだからこんなに早くできたかもも知れませぬ…）
あゝはやく戦いに入らないかなあゝ。

『2』 運命が変わった時

「ここは《ストラル》……人間たちがいる世界」
学校から帰るものたちでにぎわっている

風がピューピューとふいている……どうやら今は秋のようだ。
ハクッション!!

「ん？タクト、なぜかあ？」

「なくに!!これくらい平気さ!!」

どうやらくしゃみの主はこの少年らしい……

「お!!陰陽師サンも霊にとりつかれたんじゃないかあ」

「とりつかれるわけないだろ!!それより……」

一人の友人のかたに目を向けた

「お前のかたに猫がいるぞ？たぶん、前飼ってたやつかあ？」

え!!

みんながいつせいに声をあげる

「嘘!!マジ!!」

「おまえどうしてわかんたよあ」

「どうしてって言われてもなあ」

「さっすが陰陽師!!やっぱり靈感持ってるんだな!!」

お気づきだろうか？この少年は靈感をもっている。

名前は麗華タクト（れいか たくと）13歳

靈感をもっているため、みんなから陰陽師とよばれている。

だが、それ以外はなにもみんなと変わらない中学生だ。

いつもと同じようにみんなとワイワイ話しながら帰っていた。

ここまでは、いつもと変わらなかった……

くだが、これから彼の運命が変わる・・・これからおこることは彼しか知らない」

ある店の前を通った時にふと、一人の友人が話し始める・・・

「あ、この店最近できたばかりなんだってさ!!」

「へ〜どんな店なんだあ〜」

「ん〜よくわかんね・・・とりあえず入ってみようぜ!!」
「いいぜ〜、OK!!」などの声が上がっていく。

「タクトはどうすんだ?」

「オレも・・・」

言いかけた時・・・とつぜん目の前になにかがとおった

「え・・・?」

(キ、キ・ツ・ネ!?)

なんと通ったのはキツネだった

(なんでこんなところになんでキツネがいるんだ!?)

突然の出来事で何がおこったのかわからなくなってしまった・・・
ふと思いついた・・・(まてよ・・・ここにキツネがいるはけないじやないか!これは霊にきまつてる)

「どうしたんだタクトお〜?お〜い」

「!!」

友人の声で我にかえった

「あ、い、いやなんでもない」

「???ま、いつか。んでどうすんだよ」

(他の人には見えていないようだし・・・ほうつといってもだいいじょうぶだな・・・あ!!まてよ・・・)

このままあとを追うつてのも面白そうだな・・・)

「わりいオレ用事あるんだ。またこんどな」

「そつかあ〜まあしかたないか・・・またこんどなあ〜」

「ああ、じゃあな〜」

友人に別れを告ぐと、いそいでキツネの後を追った。

（えっとキツネが行った場所はこっちだよな・・・あ、いたいた！）

「タクトはキツネを発見した・・・これによって運命がかわってしまっただけ」

キツネは小走りで大通りを進んでいた・・・タクトもそれを追っていた、5分ぐらいあとを追っていたら、キツネはわきにそれた・・・とてもせまい道だ

（うわ！！せま！！んぐでもなんとかいけそうだな・・・）
道はだんだんせまくなっていった・・・普通の中学生はいけなそうなみちだったが、タクトはこがらなので何とか進めたのだ。

（あともうすこしで・・・い・・・け・・・る・・・の・・・うわ！！）

ドシン！！鈍い音が聞こえた...

どうやらおもいつきり力をいれてなので出た瞬間転んでしまったよ
うだ。

（いつてえ・・・ん？なんだあれ！！）

タクト目の前には空間がいりくんだ場所があった。

（いやな予感がする・・・）タクト自身も思ったがなぜか心に
ひかれた・・・

知らないうちにいりくんだ空間に近づいてた・・・手で触れてみた
その時！！

「！！！！」

誰かに引っ張られるように吸い込まれていく！！

「うわああああああああああああああ！！」

ピシ！！吸い込まれたときに空間がなくなってしまった・・・

ドシンー!!また鈍い音がした・・・先ほどよりかなり痛い・・・」

1分後・・・少し痛みが引いてきた・・・おきてあたりを見回してみる・・・

(ここ・・・どこだ?)

なぜか冷静でいられた・・・

(草?草原か・・・?ここ?)

考えているときに下から声がしてきた。

「ちよつと!!!!どいてよ!!!!おもい!!!!」

「!?!」

下にいたのはなんと女の子だった・・・

〈3〉 別の世界シープ (前書き)

3日連続達成!! (やったー!!)

4日まで連続で行けそうです

(なんか、なかなかコメディイにならない・・・)

〈3〉 別の世界シープ

《シープ》 …… 多様な種族がいる世界 コルテに近い草原

「ちょっと!!どいてよ!!おもい!!」

「!?!」

なんと下にいたのは女の子だった…

いや、少女にしておこう…

「え!?!」

驚きばかりで固まってしまった…

「はやくしてよ!!」

「え?あ、うん」

急いで立ち上がった

「はやくとかるくなつた」

少女が立ちあがり首などあちらこちらまわす

いろいろわからないことがあったので、タクトが質問しようとする
と、先に

「ほんとびっくりしたよ!次元ホールから出てきたらいきなりなにかとぶかったと思ったら人だったわ けね」

「ジゲンホール??」

「ん?あんた、ここに来るときにへんにいりくんだ空間がなかった?」

「あ!!あつた!!あれをさわつたらいきなり吸い込まれたからなあ」

「そう!!それ!それが次元ホールなの!!でも…」

少女がタクトの方をチラツと見る。

「なんで人間が通れたんだろう…普通なら見えないはずなのに・

少女が悩みこんでしまった。タクトは今まであったことをすべて話した。

「キツネってあたしのこと！？なんで見えたの！？」

「なんでってオレ靈感ある…って！！キツネ！？」

かなりびっくりした・・・（人なのにキツネって???)

「あゝそっかストラルの人はわかんないよな」

ス・ト・ラ・ル？またさらにわからない言葉が出た・・・少女がそれをさとしたかのように・・・

「んゝとねストラルってのは、私たちで言うあんた達人間がいる世界のことを言うの！！」

んでこの世界はシープンまあいろんな種族がいるの！！それで私はシープのスリグ族なの！！」

ゝスリグはね、獣から人になれる種族なのゝ

少女の説明によりだいたい理解した問題は・・・

「どうしてオレが次元ホールつてのを通れたかってことだよな？」

「そういうことゝ あんたが簡単に理解できるやつでよかつたゝ」

（そういえば不思議だな・・・こんなに簡単に理解できたなんて…）

「たぶん・・・なにかしらの力があつたんじゃないかなあゝ？」

「なにかしらって・・・」

「だってありえないことがおきたんだもん！！んまあ長に聞いてみるしかないかなゝ？」

「長？」

「そう、スリグ族の長！！なんでも知ってるからたぶんわかるんじゃない？」

（そうだな・・・ここでずっと話しても何もわからないんだしな・・・）

「うんわかった、じゃあ長っていう人に会いにいこうか。」

「んじゃ決定！！コルテていうところにいるからさっそくいくよ！！」
こうして二人はコルテに向かって歩いてきた・・・途中で

「あ！！！」

「?どうしたんだい？」

「自己紹介まだだったね あたしは リリ・テールだよ！よろしく」

「えっとオレは 麗華タクト・・・」

「へ〜タクトっていうんだ〜あ！！」

リリが途中で話をやめた。

「リリ？」

「やばいこと思い出した・・・とりあえず・・・麗華ってつけないほうがいいよ・・・」

へ？タクトは心の中で思った。

「どうして？」

「人間がここにいることはおかしいことだから・・・わかったらたぶん殺されるかも・・・」

「え！？？」

(殺される???どういうことだよ!?)

「詳しい理由は・・・いえない・・・とりあえず!!今度からタクトしかいっちゃだめ!!いいね！」

「う、うんわかったよ・・・でも長にはどう説明すんだ・・・？」

リリは再び悩んでしまった・・・

「長は大丈夫!!あの人は絶対黙っててくれるよ!!」

そこまで言うなら大丈夫か・・・

「ま、あとのことはコルテについてからにしよう?いこ!!タクト!!」

二人は再びコルテに向かった

『4』 スリグの村コルテ(前書き)

久々に更新!!

やっとコメディー(?)らしいものが出てきました

『4』 スリグの村コルテ

「二人の人が歩いてる」

一人は茶色い目と黒髪であぐら位の長さの少年だ・・・
もう一人はピンクの瞳に茶髪・・・ツインテールで、長さが胸ぐら
いの少女・・・

二人はスリグの村、コルテに向かっていた・・・

「やっとついた」

「へっここがコルテか。」

「ようこそ！！スリグの村コルテに！！」

リリがコルテについて語る・・・
「他のところよりなんか田舎っぽいけど・・・まあ結構面白いものた
くさんあるんだよ」

歴史やら、おいしい食べ物など・・・たくさん話しているうちに
ひとときわ大きな家の前に来た・・・

「ここが長の家・・・？」

タクトが質問する・・・

「そうだよ！！ここが長の家・・・なんだけど・・・
リリがつまる・・・」

「ボケてないといいな〜かなりのボケ症だからな〜」

「ボケ症って・・・」（だいじょうぶなのか!？）

「ダメだったらまあ・・・」（一発殴れば治るかな?）

二人はかなりしんぱいになってしまった・・・（書いてる自分も
不安になってきた・・・）

「と、とりあえず聞いてみるだけでも・・・」

「そ、そうだね！とりあえず入るっか!！」

タクトがドアを開けて、二人は入った・・・

リリが案内する・・・歩いているうちに人が見えてきた・・・
かなり近づき、大声で

「長あーーーーー！！！！聞きたいことがあるんだけどー！！！！」

ぐわあああああああああああああああああああああ、
かなりひびいた

(声・・・でか・・・すぎ・・・)

耳がキンキンしていたい・・・当分何も聞こえないような
気がした：

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

老人はなにも反応しない・・・

「おつかしいなあ〜けっこう大きな声を出したのにな〜」

(ふつうは聞こえるだろ！！！！) タクトは心の中でつつこんだ。

「耳が聞こえないとかは？」

タクトが思ったことを口にする。

「いや・・・聞こえないってことはないと思うんだけどな・・・」

「

リリが反論したとき・・・

「zzzzzzzz」

！？いびき？？？？

「ねてるんじや・・・」

「ねてるね・・・」

はあ・・・二人はため息をついた・・・

「どうする・・・起こすしかねえけど・・・」

タクトが提案する・・・

「問題はどうかやっておこすか・・・あ！！」

リリがひらめいたらしい。

再び大声で・・・しかもキックを入れて・・・

「おきろおおおおお！！このボケ老人！！」

ドカ！！リリの華麗なキックがさくれつした・・・威力が半端ない・

「イーリス・・・？」

また、？がついた

「行ってみればわかるよ！！結構いい人たちだから力になってくれるよ！！！」

「イーリスはたしかラリフにいたかのお・・・たずねてみたらどうだ？」

「うんOK！！長ありがと！！！」

「おお、気をつけてな・・・」

「いこ！！タクト！！！」

リリが走って、出口に向かった。タクトもいこうとすると・・・

「おお、待ちたまえ君。」

長に呼び止められた・・・何か箱を持っている・・・

「どうしたんですか？」

タクトがうかがう。

「これをつけていくとよい・・・」

タクトに箱を渡した

「あけてみなされ・・・」

タクトは箱を開けてみた・・・中にはネックレスがはいつていた・・・真中に金色の宝石みたいなのがあった。

「お守りじゃ、つけなさい・・・」

「え、あ、はい」

タクトがつけた途端！！かなりの激痛がはしった！！

「~~~~~っ！！！！」

痛みはすぐおさまった

（なんだったんだ・・・？）

タクトが考える時間をあたえないような感じでリリが戻ってきた

「タクトはやくー！！！」

「い、いまいくよ！！！」

タクトが急いで出て行った。

二人は街の中にきえていった

〈5〉 　　〈旅立ち・魔物との戦い〉（前書き）

再び連続やることができました！！

今回はちよつと戦いあり（？）

（もっと闘い書きたい・・・）

〈5〉 旅立ち・魔物との戦い

ガヤガヤとにぎわっている

(さすが街だな)とタクトは思う・・・
ここはコルテの商店街みたいなところだ。

おいしそうな食べ物　きれいな服やアクセサリーがならんでいる
だが、リリはそれに見向きもしなかった・・・

リリはある場所に一直線に、行っているようだ。

「な、なあ・・・一体どこに向かってるんだよ・・・」
タクトが質問する

「どこって旅の準備するんだよ？行くところなんて決まっているじゃん！」

はあ、タクトはため息をする

(わかんないから聞いてんだよ・・・)

わかってもらえないなあ、タクトが思っていたらリリがある店の前で止まった。

「ついたよ！」

「え？どこって・・・」

「ここは武器屋だよ」

「ええ！！！」

タクトは思わず言ってしまった

「なんで驚くの？街以外は魔物がいるのは当たり前じゃん！！！」

「オレたちの世界ではあたりまえじゃないぞ！！！」

「あ、そっかあ・・・」

こんどはリリがため息をする・・・

「つてことは武器使ったことないってことねえ」
いやそうにリリが言った・・・

(がっかりされてもなあ・・・)

「まあいいや!!とりあえず買うからね!!」

リリがテキパキと話をまとめ、すぐ武器を選び、あっという間に買い終わった。

「はい、これつかってね。」

といってタクトに片手剣を渡した。

「え？剣????」

「そう 一番使いやすいと思うよ」

自分は小型ナイフを2本買っていた・・・二刀流なのだろう。

「でもオレ、剣なんて使ったことねえぞ!!」

タクトが反抗したが・・・

「いいから持つ!!剣なんて振りまわりたら使えるよ!!」

と・・・無理やり持たされたのだ・・・

二人は街を出て、イーリスの里・・・ラリフにむかった

その途中・・・リリが行つてたように魔物が現れた

「お、ラッキー こいつで一回練習しようか」

リリはそう言うと、両手にナイフを持って走った

「おりゃ!!」

【グギャー!!】

リリがナイフで魔物を切り裂くと魔物が悲鳴を上げた

「よわ!!」

リリが余裕で魔物をやっつけた

(すこ・・・)

タクトは感心した。魔物を一撃で倒したからだ・・・普通なら少なくとも2〜3回ぐらいはやらないとまず倒せないだろう・・・それにこの前のキックだって威力が半端ない。この少女は何者なんだ・・・

「タクト!!後ろ!!」

「え??」

タクトが振り返ったら…そこには先ほどよりでかいオオカミみたいな魔物がいた…

今にも飛びついてきそうだ

【グルグワア!!】

声と同時にタクトにむかってジャンプした

(やられる!!)

そう思い、剣をついた

【グワアアア!!】

見事に命中して魔物を一回で倒した

「へ????」

タクトも驚いた。いくら命中したとはいえ、一回でなぜ倒せたのだろっ…

「うわ!!すっごいじゃ〜ん!!」

リリがほめる。

「ホントに剣振るの初めて?初めてなのに一発でしとめるなんてすごい!!」

そこまで言われると…正直言って照れくさい…

「い、いや、たまたまだよ」

「い〜やまぐれじゃないよ!!あの振り方はかなり剣を使っている人にしかできないね!!」

もしかしてタクト…剣の才能があるんじゃない?

「才能…か。そんなのあったらいいな…」

「きつとあるって!!!それより…」

リリがタクトがつけているネックレスをみて…

「それ前から付けてたっけ??ずっと気になってただけど…」

「あ、これか…これは長からもらっただけど…たしかお

守りっていったたような・・・」

「へ〜長からもらったんだ〜たしかに長ならもってるかもしれないね〜」

そういえば・・・タクトはふと思い出した・・・

（これつけた時・・・かなり痛かったけどあれはなんだったんだ？）

「タクト？何考えてんの？急ごー！！」

「あ、うん！！」

〜二人は再びラリフにむかった〜

〈5〉 　　〈旅立ち・魔物との戦い〉（後書き）

やっぱり二人だけだとコメディーになかなかできないなあ
（次あたり仲間ふやそっかな？）

『6』 街なのに人がいない！？（前書き）

しばらく更新しなくて読んでくださっていた方ごめんなさい！！

（何日間更新しなかったんだろう・・・エクト25日からだから・・・

・
1 2 3・・・え！？10！？10日間も更新してなかったんだ・・・

）

『6』 街なのに人がいない!?

「ほら!!そつちにいったよ!!」

才カミみたいな魔物がこつちに逃げてくる・・・
ピュ!!タクトは思いっきり剣を振る

【グガ!!】

また一発で魔物を倒した・・・先ほどよりもうまくなってきたようだ
「ふう〜やつと全部の魔物を倒したね」

「ああ、結構きつかったな・・・」

なぜこの会話をしているかというと・・・

二人はラリフにむかっている途中に魔物の群れにそうぐうしてしま
ったのだ・・・

(どんだけ不幸なの!?)

ざっと30匹いたようだが、わずか10分で全部倒したようだ・・・
(はや!!)

ラリフまであと少し・・・の、はずなんだが・・・ここら辺は霧が
濃いためかなり近くにいかないと分からないようだ・・・

「おかしいなあ〜」

リリが疑問を口にする

「ここら辺はいつも晴れているって聞いたんだけどなあ・・・」

「晴れてるって・・・どこが!?霧ばっかりだよ!!」

「だからおかしいって言うてるでしょ!!とりあえず街いこ!!街
!..」

二人はダッシュで街に行った・・・が、人は誰もいない

「なんで人がいないの！？霧のこと聞けないじゃない！！」
さすがに自分も疑問に思う

（たしかに街だよなあ・・・人がいないなんておかしいよ・・・）
「と、とりあえず先進んでみよう！！」

先に進んでみたが、人は誰もいない・・・それどころか霧もかなり濃くなってしまった・・・この霧の濃さと、誰もいないゴーストタウンにいつまでいないといけないのだろう・・・

「このままじゃ一生さまようことになりそうだな・・・」

タクトがつい言ってしまった・・・リリが反論する・・・と思いきや「んゝありえる話かもねゝ」

リリの余裕の言葉・・・かなり冷静だ・・・（普通なら騒ぐだろ！！）

タクトが突っ込む

「・・・なんでそんなに冷静なんだよ・・・」

「えゝ騒いだって意味ないでしょ？余分な体力使いたくないよゝいっつ魔物が襲ってくるか分かんないんだよ！！」

「そ、そういえばそっか・・・人もいないんだったら魔物が来る可能性もあるな・・・」

「あ、もしかして魔物のせいでは人がいなくなっただかもよゝ（笑）霧も魔物のせいかもねゝ（笑）」

笑っているリリにタクトが再び突っ込む

「笑うかよ普通・・・」

「いいでしょ別にゝいないのは事実・・・」
言いかけたその時！！

ゝゝゝ

「！？」

いきなり歌声が聞こえてきた・・・

「歌!？」

「人がいるみたい・・・早く行ってみよ!！」

二人は声を頼りに行ってみた・・・すると霧の中にぼんやりと人影
みaitたのが見えてきた

~~~~~

歌っているのはこの人らしい・・・もつと近づいてやっとはつきり  
見えた

目は青くて髪が長く腹まである・・・

ウェーブがかかかっていて金髪、まるでフランス人形みたいだ・・・  
年は同じぐらいの少女だ

つかさずリリが話す

「んねえ、ちよつといい？」

「!？」

少女も気づいたようだ・・・いきなり話しかけたのでちよつとびっ  
くりしている

「別に怪しいもんじゃないよ!!ちよつと霧の原因が知りたいんだ  
けど・・・」

かなり怪しんでいる・・・用心深いのはいいんだが・・・イライラ  
する・・・

ちよつとキレかかってリリが自  
己紹介をした・・・

「んゝもう!!あたしはスリグ族のリリ・テール!!怪しいもんじ  
ゃないよ!！」

ハアゝタクトがため息をした・・・

(騒いでも意味ないってさっき言ってたじゃないか・・・)

と思いつながら自分も自己紹介をする・・・  
「オレは、れ・・・いや・・・タクトだよ。」  
危うく麗華と言ってしまうところだった・・・

ちよつと間をおいて少女が口を開いた

「・・・私はイーリス族のルイ・ナリストと申します・・・先ほどは  
疑って申し訳ございません・・・」

丁寧な言葉遣いだ・・・結構大人びている

「いいよ、そんなこと それより霧のことなんだけど・・・」

「霧の原因は私たちでもわかりません・・・」

「んじゃあいつ頃から出始めた??」

リリが質問する

「えつと・・・つい最近のことです。たぶん1週間ぐらい前でしょ  
うか・・・」

「こんなにもすぐに霧って出るもんなのか?」

今度はタクトが質問した

「普通はありえないと思うな〜ここら辺は空気が乾燥しているって  
聞いたよ、そうでしょ?」

「ハイ、その通りです。しかも、ここでは雨でも年に数えられる程  
度しか降りません」

「ん〜そかあなんでできたんだらう・・・」

リリも頭を抱えてしまった・・・

「んま、とりあえずこの偉い人に会わせてくれない?いろいろ聞  
きたいことがあるんだよね〜」

さらつと流し、本題に入った

「それでしたら私が案内します。」

「助かるよ んじゃよろしく」

「はい、ではついてきてください」

どんどん進んでいく・・・行っているうちに階段がみえてきた

「1」の一番上の家にいます。かなりつらいですけど頑張りましょー」

こうして3人はかなり長い階段をのぼっていった

〈7〉 〱階段だらけ〱（前書き）

またかなり時間を開けてしまいました・・・

（見ていてくれた方ゴメンナサイ・・・）

今回はちよつと省略しているところもあります。

（全部書いた見あきるので・・・）



〈7〉 階段だらけ

1段、また1段と登っていく・・・

「あともう少しで登りきります。頑張りましょう。」

ルイが疲れきった二人を励ます・・・無理はない、この階段は約500段近くあるのだ・・・

「あと少して・・・いつになったら着くの!!」

「まだあるって、この階段・・・一体何段あるんだよ!？」

二人が息を切らしながら互いにもんく(?)を言う・・・

(あれ?)

ルイが何かに気がついた

「ねえ・・・なんでルイはそんなに平気な顔をしているの・・・?」

「あ、そういえば・・・毎日登っているからか?？」

「はい、毎日・・・これを6回ぐらいですかね・・・」

「6回!？」

タクトとルイが口をそろえた

「ええ、階段はこれだけではありませんからね。(笑)」

笑って言っている・・・ルイとは一体何者なんだ・・・

「さて、休憩時間は終わりです。はやく長老がいる家に行きましょう。」

とりあえずルイは仕切るのがうまい人のようだ。

〈10分後〉

とりあえず頂上に着いた!!・・・・・・が、それらしき建物が見つからない・・・

「ねえ・・・ルイ・・・その・・・長老さんがいる建物ってどこ・・・?？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「家すらないよな・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルイは黙っている・・・

「・・・ゴメンナサイ・・・」

「まさかと思うけどね・・・」

「そのまさかだろ・・・」

言うまでもない・・・道を間違えたのだ・・・（ありやりや）

2人がいつせいにため息をする

「んでこつからどうするの（怒）」

「もどつて他の道を探すしかないだろ・・・」

ルイがタクトが言った後に急にぱつと明るくなった

「そうですね、戻って探しましょう！！ここではないんだったら近

くの階段だと思いません。」

「え〜戻んの〜」

「では早く降りましょう。」

いやそうなりりとは裏腹に、ルイはちゃっちゃと話をまとめてしま

った・・・

（約30分後）

階段を降り切った。

「たぶん近くに階段があると思います。それを登ればつきます！！

（たぶん）」

最後にちっちゃく言ったたぶんを除けば、自信たっぷりようだ。

（ホントに大丈夫かな・・・）

この言葉でタクトもリリも安心したようなので二人とも嫌とは言わずに登った

（50分後）

頂上に着いた!!………が、またしてもそれらしきものは見当たらない……

「また間違えてしまいました……ですが!!次こそ絶対に大丈夫です!!(たぶん)」

また、ちっちゃくたぶんといったが、ルイ以外にここを知っている人はいないので、ついていくしかなかった………

↳その後の結果↳

リベンジ2回目……失敗  
リベンジ3回目……失敗  
リベンジ4回目……失敗  
リベンジ5回目……失敗  
リベンジ6回目……失敗

さすがに6回まで行くとルイも疲れしてきたようだ……そして二人はダウン寸前……

(6回もよく付き合っただな)

リリは我慢の限界になり、ルイに激怒した

「ちよつと!!いつになっただら着くの!?(怒)」

「う……ゴメンナサイ……」

「あゝもう!!ここ階段何個あるのよ!!(怒)」

リリが起こりながら質問した

「15個です!!」

「はあ????15個!?なんでそんなにあんの!!(怒)」

15個……なぜそんなに階段があるのだろうか……

タクトは心の中で考えてみた……そしたら一個気づいたことがあった

「なあ……そんなに階段があるんだったら、目印がないと困るじ

や……」

「あ!!!そつか!!ルイなんか目印みたいなのはない?」

「え……見たことはないです……」

「んじゃあ違うか……そしたら違う方法で……ってあれ???  
リリが何かに気づいた

「ねえあれなに???」

リリが指をさした、さした方向に看板みたいなのがある……  
近づいてみると、何やら文字が書いてあるようだ……ルイが  
読んでみる

「えつと」「この先長老の家、用がないものは近づくな」……と書  
いてあります……」

「これってさ……」

「間違いなく案内看板だね……」

あきれている二人に対してルイは

「こ、こんなところに、こんな便利なものがあつたのですね!!感  
動です!!」

明らかに感動……喜んでいるようだ……

「だからみなさん一回で家に着くんですね てつきり場所を覚えて  
いると思っていました」

「こんなのに気づかない方がおかしいと思うけど……」  
リリが即座に突っ込む

「これで長老の家にいきますね!!さっそく行きましょう」

「え……」またいくの……」

「はい!!早く行きましょう」

しびしび登り始める……

〜20分後〜

やっと、長老の家に着いた……ここにきてから何時間かかった

「んだらう・・・」

「着きました!!」

「ほんとについたの・・・?」

「はい!!今度は間違ひありません!!」

「やっとついたか・・・」

ルイが玄関(?)に近づき、ドアを開ける

「長老、あなたに会いたいつていう人たちがいるのですが」

返事はない・・・まさか前みたいに寝ている・・・?

2人は不安になった・・・

「長老??いないのですか?」

ルイが再び呼びかける・・・すると

「家に入る時はノックをしると教えたはずだが?」

家の奥から女の人の声が聞こえてきた・・・長老と言う割には若い感じがする・・・

「ごめんなさい・・・」

ルイが泣きそうになりながら謝る・・・

「まあいい、今度から注意すること!!まったく・・・何度言ったらわかるんだ!!」

いきなりの説教・・・自分たちがいることを忘れていたのだろうか・・・

ルイが涙目になって立っている・・・ちよつとかわいそうだ・・・

「あの!!イーリス族の長老さんですよね!?!」

リリが大きな声で言った。(勇気あるな・・・)

「ん?ああ、そうだが・・・何か用か?」

さつきまで黙っていたルイが話す

「えつと、この人達はスリグ族の長からこのことを聞いてきたそうです」

「ほう・・・あの長からか・・・」

この話は気にとめたようだ

「いいだらう入りなさい、じっくり話を聞こうじゃないか!!」

とりあえずいえにはいることができるようだ・・・  
これでやっと話が聞ける・・・はつきりいって長かった・・・  
2人はルイに続いて家にはいっていた。



『8』 言っではいけない真実(前書き)

しばらく更新せずにネタを作っていました・・・  
(そろそろネタ切れのため・・・)

長い間ゴメンナサイ・・・



『8』 言っではいけない真実

ガチャン

タクトがドアを閉めた・・・振り返ると女の人がいる・・・この人が長老なのだろうか??かなり若い・・・20代ぐらいに見える・・・

「それで話とは何だ？」

長老(??)が聞く・・・タクトがわけを話そうと思ったら、リリがルイの方を見て

「ここからはちょっとルイには話せないから、家から出てほしんだけど。」

それを聞いてルイと長老は不思議そうな顔をした

「え???なんでだめなんですか？」

ルイが質問する・・・だがその質問には答えられない・・・ルイにはタクトがストラル人とは言えないからだ・・・

「何かわけありか・・・だが、ルイは人にばらすようなことはしない子だ、言ってもいいだろう」

長老の言葉に、リリは戸惑う・・・そんなに大変なことなのであるうか？

「んじゃあ言うけど!!人にばらさないことは絶対守ってね!!」  
リリが念を押すように言った・・・そしてリリが説明した

ここに来た理由・・・そしてタクトがストラル人であること・・・

長老とルイは黙って聞いていた・・・リリの話が終わるとルイは、タクトの方を見て

「そんなことがあったんですか・・・しかし驚きました!タクトさんがストラル人だったんだとは...」

「そうだな、たしかにありえないことだからな……だが、君達が期待してたことは一切分らない……悪いな」

長老の言葉にリリはがっかりして

「そつかあゝゝ手がかりなしか……残念だけども話からなかつたね」

たしかに、なにも分からなかった……でも、タクトは疑問に思うことがあった……

「なあ……なんでストラル人って言ったらだめなんだ……？」

タクトが言った瞬間、みんなが一斉に黙った……言っただめだったことなのであろうか……？

少ししてから長老とルイがいつせいに突っ込む

「このことについて長に何も聞いてないのかね？」

「リリ！何も教えてあげなかつたんですか!？」

ダブルの突っ込み……どっちから答えればいいかわからない……

「ええと……あたしは！！ばれなきや大丈夫だから別に言わなくていいかなって思ってたの！！長は……たぶんあたしが言ったか、長老が言うと思ったと思う……」

「それで、本人がこのことを知らずに他の人に言ってしまったらどうするのだ？」

「……一応注意はしておいたんだけど……」

はあゝと長老はため息をしてから

「まあ……いいだろう……ここですべて話す……」

長老の話はこんなだった

くかつては……この世の世界は一つだった

だが・・・最初から種族は違っていたのだ・・・  
一つは、今で言うと《シープ》この種族は不思議な力を使うことができる・・・

いまは、多様な種族があるが、もとは一つであった

もうひとつは《ストラル》・・・不思議な力はなかったが、高レベルな知識があった・・・

この二つの種族は、お互いを受け入れず・・・たがいに分かれ・・・  
そして、争いが行われた・・・

これだけでは圧倒的にシープの方が有利に思える・・・しかし、現実  
実は違った！！

ストラルはその高い知識を使って、兵器を作り出したのだ・・・

もちろん、シープは自分が持っている力だけで戦っていたので、兵器はなかった・・・

そして、シープは負けた・・・ここまでも地獄だったが、これから  
もっと恐ろしい地獄が待っていた・・・

ストラルは、シープを無理矢理したがわせ、その力を使い・・・新たな技術を生み出していた・・・

ここまでは、まだ良かった・・・しかし、日がたつにつれてストラルはシープを物扱いするようになり・・・休みを与えず・・・素直に命令を聞かなかつたものは殺し・・・そして、すべての力を使いきって役にたたなくなつたものは・・・捨てるか、実験台にしたの

だ・・・

毎日毎日、このような行いをされてきたシープは、また戦おうとしたが・・・自分たちはあの兵器の前では無力だ・・・戦っても負ける・・・しだいにシープは神に祈り、助けを求めている・・・

その祈りが通じたかどうかは知らないが、神は、この世界を二つに分けた・・・

これによりシープは解放され、世界には幸福が訪れた・・・

「と、古い本に書いてあった話なんだが・・・問題はここからなんだ・・・」

長老からバトンタッチされたようにルイが話し始めた

「ストラル人はこのことを、もう忘れていますが・・・私たちはこの恨みを忘れないようにと、ずっと昔から受け継いでいます・・・」

「それでストラル人がいたら憎しみがよみがえって、殺しちゃんじゃないかな？」

「その通りだ・・・特に気おつけなといけないのがライル族だ・・・あそこは、ストラル人の血が混ざっているものがある・・・それだけで殺しているのだから・・・もう生き残っているものがあるかどうかも分からないからな・・・」

「え???どうやってストラル人だかわかるんだ?」

タクトの質問にはたしかかなことはわからない・・・

「気配とかなんじゃない・・・?」

リリのあいまいな答え・・・分からないのは仕方ないが・・・

「言っちゃいけないことは分かったんだからもういいよね?それよリリ!!!」

リリが話題を変えた

「この霧はなに??霧がでるなんてここではおかしいんじゃないの!??」

リリの質問に対して、長老は感心した

「ほお・・・よくわかったな。たしかに最近異常気象になっている・・・」

「その理由は??」

「確かなことは言えない・・・だがもしかしたら・・・エレボスが目覚める前兆なのかもしれない・・・」

え!!とリリは声をもらし

「エレボスってあの・・・?神話に出てくるやつでしょ?」

「ああ、そうだ・・・だが、それは神話ではなく本当のことなのだ・・・信じたくないがな・・・」

「どうしてそれが言えんの!??」

少し長老は黙った・・・それを説明しようか迷っているらしい・・・そして

「君は光の戦士を知っているかね?」

「ええと、たしか昔エレボスと戦ったものとか・・・」

「その特徴は?」

「体の一部が金色になっているって聞いた・・・って、え!??」

リリがびっくりするも仕方ないだろう・・・ルイの髪の毛が金色なのだ・・・

「え、う、うそ・・・まさか・・・ルイが・・・?」

しばらく沈黙が続いた・・・そして

「その通りです・・・私は光の戦士の一人・・・エレボスを倒すために生まれてきたもの・・・」

古い神話は本当だった・・・そしてルイは、重い宿命を持って生まれてきたのだ・・・



〈9〉 〽覚醒〽 (前書き)

前回、ルイから重大発表(？)がありました

かなり重大キーワードだったんです (やっと出せてよかった)

2人は不幸です(笑)これからいろいろなことに巻き込まれていきます(笑)

本当にルイが光の戦士なのだろうか・・・？  
たまたま髪が金色だったという可能性もある・・・しかし、この異常気象を考えると可能性が高いことのように思える。

「ホントに・・・ホントにそうなの!？」

リリはまだ信じられないよう・・・いや、なんだか認めたくないような感じがしてくる・・・

「本当です・・・」

「証拠でもあるの？髪の色だけじゃ証拠になんないよ!！」

リリが抵抗してきた・・・なぜそこまで否定するのだろうか？

「えくと・・・なんというか・・・本能？」

「ほ、本能??？」

リリとタクトが口をそろえた・・・真剣に質問しているのに・・・  
なんというばかげた答えなんだろうか・・・

「なんか心の中からほわ〜んと浮かんでくるというか・・・頭の中に最初からある感じですよ」

人によつては馬鹿にしているような感じがしてくる・・・

一回ため息をついてリリは

「そんなんじゃないよ・・・もっと具体的にない・・・？」

「具体的つてどんな感じですか？」

この質問返しには多少困る・・・

「う〜ん・・・!！」

何かいいアイディアを思いついたようだ

「魔術は？本で読んだことあるよ!！光の戦士は他のものとは違う、特殊な魔術を使つて!！」

(本・・・?)

リリの言葉に、今まで黙っていた長老がつばやいた

「あ!それならたぶんできます」



ルイはそういうと、シュピ！！とつえを出した

「離れてください！！」

みんながルイから離れた。それを確認してからルイは

「いきますよ！！」

この言葉を合図にしたかのように、ルイの周りから黄金の光が出てきた

「ちよつとまで！！へやのなかでやったら・・・」

長老の言葉ムシで

（光よ・・・！！）

最初の言葉しか聞こえなかったが・・・何やら呪文みたいなのを唱えていた

何も起こらないようにおもえたその時！！

ドカーーーーーー！！

上から隕石みたいに、光の塊が落ちてきた。

すさまじい破壊力・・・部屋の中がめちゃくちゃだ・・・

しばらく沈黙が続いた・・・ルイが笑顔でこつちに振り返って

「これで信用してくれますか？（かなり笑顔）」

「え、ええいいけど・・・でも・・・」

リリがちらりと長老を見る・・・怒り爆発寸前だった・・・（やばいよやばいよ）

「え！！まだしんようしてくれないんですか！？（半泣き）」

「そ、そうじゃなくて・・・」

リリがタクトにこそこそ言い始める・・・

（ちよつと長老の様子見てみて・・・）

タクトも長老を見た・・・いつ怒りだすのか分からない・・・

（あれはやばいだる・・・）

(ルイ・・・また説教だね・・・)  
(あの様子じゃ・・・オレたちも巻き込まれそうだぞ・・・)  
(!!やば!!今のうち逃げとこっか・・・)  
(ひどいけど賛成・・・この部屋はやく逃げた方がいいしな)  
(んじゃあいくよ!!)  
リリの言葉を合図に、2人ともダッシュで出口に向かう・・・(うわ!!ひど!!)  
「あれ?2人ともどこに行くんですか??」  
ルイの言葉を見無視!!長老が怒る前に、逃げる!!それが二人にとつていま、一番大切なことだった・・・そして急いでドアを開け・・・  
・出た

ボタン!!

ドアを閉めてようやく安心できた・・・

「セ~~~~~フ」

リリが歓喜の声を上げる

「たすかった~~~~」

タクトもこれで安心した・・・

「まったくおまえはああああああああああああ!!」

激怒×100」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

はじまった・・・長老の説教が・・・これは早くても1時間はかかるだろう・・・

「どうする~~~~?ここに居たってどうしおもないし・・・」

リリが困った声でいう

「・・・とりあえず自由行動にしないか・・・?」

「それ賛成くんじゃあ2時間後にここに集合ね!!」(2時間って・・・)

2時間でもまだ終わってないような気がするが・・・まあ、とりあ

えずいいだろう

〈2時間後〉

タクトが来た時にはもうリリはいた

「あ！来たね！！」

「中の様子は？」

「静かになったよ、たぶん終わったんじゃない？」

「ずいぶん早い・・・なにかあったのだろうか・・・？」

リリがドアを開けたその時！！

シュピユ！！

なんとナイフが飛んできた！！

「うわあ！！」

リリがギリギリでかわした・・・だが今度は連続で飛ばしてくる！！

シュピピピピピピピピピピ！！

ざっと20っ本ぐらい飛ばしてきた！！これではさっきみたいによ  
けられない！！

「ちっ！！」

リリは舌打ちしてから、飛んだ・・・後ろに・・・

そして空中を、3回転してから華麗に着地！！すごい身のこなしだ  
タクトは唾然としながらみていた・・・

「なにすんの！？（怒）」

リリが怒る・・・まあ、怒るのは普通だが・・・

「ほお、なかなかの身のこなしだな」

ナイフを投げた犯人は長老みただ・・・

「刺さったらどうするつもり！？（怒）」

怒っているリリとは裏腹に長老はかなり冷静な回答を述べた

「よけると思っていたから投げたのだ、君ならよけられると思ってね」

そう言われるとこれ以上怒れない・・・

「予想は当たった・・・いや、予想以上だったかもしれない・・・これなら安心だ」

「へ？安心？」

なぜいきなり言われてよくわからなくなってくる・・・

「さっきの判断力と言い、今の身のこなし・・・これを見込んで君たちに頼みがある」

いきなり頼みごとをされるとは・・・ちょっと想像外だ

「実は・・・ルイの護衛を頼みたい」

「へ？護衛？？」

「いや、言い方が悪かったな、一緒に旅をしてほしいんだ。ようするに・・・仲間になってくれ」

「えええ！？なんで！？」

次から次へと・・・話がはやい・・・

「とりあえず中に入れ、詳しくはそこで話す」

よくわからないが、いまは入った方がよさそうだ・・・2人ともいえに入った。

家に入ってみると・・・かなり落ち込んだルイがすわっていた・・・

「それでわけは、ルイが光の戦士として覚醒したからだ」

「か、覚醒？」

何を言っているんだろうか？？さっぱりわからない・・・

「さっきの技を見ただろう、あの技は私でも見たことがない・・・あの技はたぶん、光の戦士が使っていたものだろう・・・」

「それはさっき覚醒したってこと？」

「その通りだ、ということは、エレボスがいるのも本当だったことだ・・・ルイが光の戦士なら当然倒さなくてはならない。だが、一

人では無理なので他の光の戦士も探さないといけないのだ」

「それをオレたちが手伝う……ってことか？」

スケールがすごくなってきた……これも当然、予想外だ……

「そうだ、話が早いな！ルイだけでは必ずドジルのでね……」

長老も気づいていた……ルイがかなりドジルことを……

「というわけで、一緒についていってくれないか？」

「あたしはいいよ、タクトもいいよね？」

タクトがうなずき、これでルイと一緒に旅をすることになった

「決まったならさっそくいこ！！いつまでもルイ！！落ち込まないの！！」

いこうとしたとき……

「待ちたまえ、2人とも魔術は使えるか？」

「あたしは使えるけど……タクトはつかえないよね？」

当然だ……タクトはストラル人だ……

「なら、いますぐ覚えたほうがいい」

「え！？ストラル人って魔術使えないでしょ？」

「ストラル人が来たことはないのだ、意外とできるかもしれない。

それに、今後役立つからな」

なんだかやばくなってきた……

「別に覚えなくてもいいんじゃない？」

「い・ま・す・ぐ！！覚えるべきだ！！さあ、やるぞ！！」

つかまってしまった……長老に……



〈9〉 〽覚醒〽 (後書き)

ついにつかまったか……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9138j/>

---

ステラ

2011年1月20日04時01分発行